
私たちは平和ボケに陥っていないか

(矢作征三、巨大災害に立ち向かうニッポン、東京、社会評論社、2015、p.29-39)

2018年6月15日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

本論文では日本人の災害に対する危機意識の薄さとどのように備えるべきなのかについて様々な角度から考察している。

日本経済は過去にオイルショックや円レート切り上げなど、幾度となく危機と呼ばれる急激な経済的变化にさらされてきたが、その都度無事乗り越え現在に至る。これは自然災害の危機に対しても同様で、初めて経験する近代都市に起こった阪神・淡路大震災、新潟県中越地震でもそれぞれ3年間ほどで表面上地域の復興が感じられるようになった。しかし一方、広域にわたって津波被害をもたらした東日本大震災では、地震や津波による被害に加え、福島第一原子力発電所における広域の放射線汚染による除染問題などの様々な問題を残し、未だに復興できずにいる。

日本人の平和偏重の遺伝子により、実際は多くの危険に曝されているという現実があるにも関わらず、自分たちが被害の当事者にならないとその危険が自分たちには関係ないものであると認識し、危険に対する対策を考えない。東日本大震災が起き、日本人の防災意識に少しの変化はあったと思われるものの、多くの人は災害が起きたら地域の支援に依存する「共助」、行政機関の支援依存の「公助」に期待をしており、実際に災害が起きればその社会システムが正常に機能するとは限らないということを忘れている。災害に直面した際、多くの避難所は地域住民の約10%しか収容できず、支援物資に関しても重要な幹線道路の封鎖などにより物流機能が停止し、十分な物資が届くとは限らない。このような現実にも早めに気づき、それぞれが危険に対する認識をもっと深化させ、十分に備えることが今必要となっていることである。

また、地震の発生に時間的なサイクルがあることは過去の地震発生の歴史を顧みると理解できる。静穏期と活動期が周期的に現れ、現在は活動期に当たり、最近の地震をM6級の中規模地震とすると、現在はM7級の地震が発生する時期となり、そしてこの後、大正関東地震のようなM8級の大地震が起こればと考えられる。何かしらの対策を考えなくてはならないが、大正関東地震の体験を語るができる人はほとんどおらず、我々は大地震が起きたことを想像して、それに対する訓練を行うしかない。多くの人が大災害に直面したことがなく、災害や非常時に対して無意識、無思考状態に陥り、平常時から非常時に切り替えるための心理的なスイッチが入らない状態となっている今、非常時、本能的に反応する能力を身につけるため、普段から教育・啓発プログラムの受講や訓練を続け、疑似体験を積み重ねて学んでいくべきである。

大地震が起ってしまう前に自分たちの置かれている状況を見つめなおし、本格的な備

えを整える時期にあると考えられる。